

1. (1) \mathbb{R}^2 上のベクトル場 $\mathbf{V}\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} := \begin{pmatrix} 5x^4 + 8x^3y - 9x^2y^2 + 10xy^3 - 2y^4 \\ 2x^4 - 6x^3y + 15x^2y^2 - 8xy^3 + 5y^4 \end{pmatrix}$ と, $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t^2 \\ t^3 \end{pmatrix}$ ($0 \leq t \leq 1$) で表される曲線に対し, $\int_I \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$ を定義通り計算せよ.
- (2) (1) の \mathbf{V} に対し, $\mathbf{V} = \text{grad}(f)$ となる関数 $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ をひとつ見つけよ. これを利用して $\int_I \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$ を計算せよ.
2. (1), (2) では $\Omega = \mathbb{R}^2$, (3), (4) では $\Omega = \mathbb{R}^2 - \{\mathbf{0}\}$ とする. Ω 上の以下のようなベクトル場 \mathbf{V} と, \mathbf{l} で表される曲線について, $\int_I \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$ を計算せよ. ただし $\mathbf{u} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \in \Omega$ である.
- (1) $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} x^2 - y \\ y^2 - x \end{pmatrix}$, $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t^2 \\ t^3 \end{pmatrix}$ ($0 \leq t \leq 1$) (2) $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} -\sin x \sin y \\ \cos x \cos y \end{pmatrix}$, $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t \\ 3t \end{pmatrix}$ ($-\frac{\pi}{4} \leq t \leq \frac{\pi}{4}$)
- (3) $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \frac{2\mathbf{u}}{|\mathbf{u}|^2}$, $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t-1 \\ 2t+1 \end{pmatrix}$ ($-1 \leq t \leq 1$) (4) $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \frac{1}{|\mathbf{u}|^4} \begin{pmatrix} y(y^2 - x^2) \\ x(x^2 - y^2) \end{pmatrix}$, $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t \\ 1-t \end{pmatrix}$ ($0 \leq t \leq 2$)
3. (1) $f: \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ を \mathbb{R}^n 内の領域 Ω 上の C^∞ 級関数とし, $\mathbf{l}: [a, b] \rightarrow \Omega$ を曲線のパラメータで $\mathbf{l}(a) = \mathbf{l}(b)$ をみたすものとする. このとき $\int_I \text{grad}(f) \cdot d\mathbf{l} = 0$ を示せ.
- (2) \mathbb{R}^2 上のベクトル場 $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} 2y \\ x \end{pmatrix}$ と $\mathbf{l}: [0, 2\pi] \rightarrow \mathbb{R}^2$, $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} \cos t \\ \sin t \end{pmatrix}$ に対し, $\int_I \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$ を計算せよ.
- (3) (2) の \mathbf{V} に対し, $\mathbf{V} = \text{grad}(f)$ となる C^∞ 級関数 $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ は存在しないことを示せ.
4. (1) $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ を連続関数とする. $\Omega_f := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^n \mid f(\mathbf{u}) < 0\}$ が \emptyset でないとき, Ω_f は \mathbb{R}^n の開集合であることを示せ.
- (2) \mathbb{R}^n 自身は \mathbb{R}^n の開集合であることを示せ. $A := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^n \mid |\mathbf{u}| \geq 1\}$ は \mathbb{R}^n の開集合ではないことを示せ.
5. Λ を (可算とは限らない) 集合とし, 各 $\lambda \in \Lambda$ に対し \mathbb{R}^n の開集合 U_λ が定まっているとする. このとき, $\bigcup_{\lambda \in \Lambda} U_\lambda$ と $\bigcap_{k=1}^m U_{\lambda_k}$ ($\lambda_1, \dots, \lambda_m \in \Lambda$) はともに \mathbb{R}^n の開集合であることを示せ. $\bigcap_{\lambda \in \Lambda} U_\lambda$ が開集合とならない例を挙げよ.
6. (1) $U, V \subset \mathbb{R}^n$ が弧状連結で $U \cap V \neq \emptyset$ であるとき, 和集合 $U \cup V$ も弧状連結であることを示せ.
- (2) 弧状連結な $U, V \subset \mathbb{R}^n$ で, 共通部分 $U \cap V$ は弧状連結でないようなものの例を挙げよ.
7. Ω を \mathbb{R}^n 内の領域とする.
- (1) \mathbf{l}, \mathbf{m} を Ω 内の曲線のパラメータとすると, $\frac{d(\mathbf{l} \cdot \mathbf{m})}{dt}(t) = \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \cdot \mathbf{m}(t) + \mathbf{l}(t) \cdot \frac{d\mathbf{m}}{dt}(t)$ であることを示せ. ただし関数 $\mathbf{l} \cdot \mathbf{m}: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ は $(\mathbf{l} \cdot \mathbf{m})(t) := \mathbf{l}(t) \cdot \mathbf{m}(t)$ (右辺は \mathbb{R}^n の内積) で定める.
- (2) Ω 内の物体 P が, 各点 $\mathbf{u} \in \mathbb{R}^n$ において力 $\mathbf{F}(\mathbf{u})$ を受けて運動しているとする. $\mathbf{F} = -\text{grad}(f)$ であると仮定し, 時刻 t における P の位置を $\mathbf{p}(t)$ とおくと, $E(t) := \frac{1}{2} \left| \frac{d\mathbf{p}}{dt}(t) \right|^2 + f(\mathbf{p}(t))$ を P のエネルギーとよぶ. E は定数関数である, つまり $\frac{dE}{dt} = 0$ であることを, 運動方程式 $\frac{d^2\mathbf{p}}{dt^2}(t) = \mathbf{F}(\mathbf{p}(t))$ が成立することを使って示せ.

(提出の必要はありません)

補足. \mathbb{R}^n の開集合, 弧状連結性などについては, 後期の「位相空間論」において, より一般的な視点から論じます. この講義で大切なのは, 領域と言ったら弧状連結な開集合のことを指し, 従って領域 $\Omega \subset \mathbb{R}^n$ について (1) 任意の $\mathbf{u} \in \Omega$ に対し, $U(\mathbf{u}; r) \subset \Omega$ となる $r > 0$ が存在し, (2) 任意の $\mathbf{u}, \mathbf{v} \in \Omega$ を結ぶ曲線 $\mathbf{l}: [0, 1] \rightarrow \Omega$ が存在する, ということです. より重要なのは (1) で, 各点 $\mathbf{u} \in \Omega$ の「近く」がすべて Ω に含まれることを意味します. Ω 上の関数 $f: \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ の, $\mathbf{u} \in \Omega$ における \mathbf{v} 方向の方向微分とは $\lim_{\epsilon \rightarrow 0} (f(\mathbf{u} + \epsilon\mathbf{v}) - f(\mathbf{u})) / \epsilon$ ですが, Ω が開集合であれば, $\epsilon > 0$ を十分小さく取るとき (具体的には, $U(\mathbf{u}; r) \subset \Omega$ となる $r > 0$ に対し, $0 < \epsilon < r$ のとき) $\mathbf{u} + \epsilon\mathbf{v} \in \Omega$ となり $f(\mathbf{u} + \epsilon\mathbf{v})$ という値が定まるので, 問題は起こりません. もし Ω が開集合でないと, いかなる $\epsilon > 0$ に対しても $\mathbf{u} + \epsilon\mathbf{v} \notin \Omega$ ということがあり得て, $f(\mathbf{u} + \epsilon\mathbf{v})$ が定まらず, 微分が定義されない可能性があります.

問題 7 は, 力学的な立場から見た勾配ベクトル場の重要性を示します. 考えている系に働く力 (例えば重力) がポテンシャルを持つとき, エネルギー保存則は運動方程式から数学的に導かれる定理であることがわかります. 5/17 の講義でやった定理 5.11 はこの意味で重要です. (力学をやっていない人は, このあたりは気にしなくても構いません)

幾何入門レポート問題 5 (2019 年 5 月 17 日)

担当：境 圭一

各自の学籍番号の下 2 桁を n とおく．例えば 18S1099 ζ なら $n = 99$, 18S1100 ξ なら $n = 0$. また $a = n + 10$, $b = 70 - n$ とする.

\mathbb{R}^2 上のベクトル場 $\mathbf{V} = \begin{pmatrix} V_1 \\ V_2 \end{pmatrix}$ を $V_1(x, y) = \sum_{k=3}^a k^2 x^{k-1} + 6y$, $V_2(x, y) = 6x + \sum_{k=3}^b k^2 y^{k-1}$ で定める．パラメータ $t: [0, 1] \rightarrow$

\mathbb{R}^2 , $\mathbf{l}(t) := \sqrt{2} \begin{pmatrix} t \cos(\pi t/4) \\ t \sin(\pi t/4) \end{pmatrix}$ で表される曲線に対し, 線積分 $\int_I \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$ を計算せよ.

(5/24 の 3 限開始時まで提出してください)

http://math.shinshu-u.ac.jp/~ksakai/19_geometry/19_geometry.html